

2nd
2011夏

INFFA



Yamazaki Ryo × Takahashi Teruo

山崎りょう × 高橋輝雄



左/山崎りょう、右/高橋輝雄

Information

山崎りょう × 高橋輝雄 2人展

すべてのものは呼吸する

— the breath of all things

10/7 [金] → 9 [日]・10/14 [金] → 16 [日]

OPEN 12:00 → 19:00 (最終日 17:00まで)

瑞聖寺 ZAP ギャラリー

<http://kokyuart.blogspot.com>

後援/産経新聞社 協賛/株式会社北嶋紋製作所

ZAP アートプロジェクト企画

※ギャラリーには、駐車場はございませんのでご注意ください。

山崎りょう Yamazaki Ryo

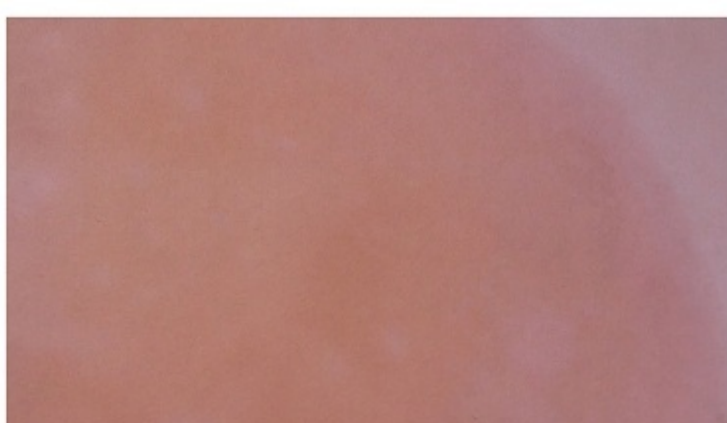
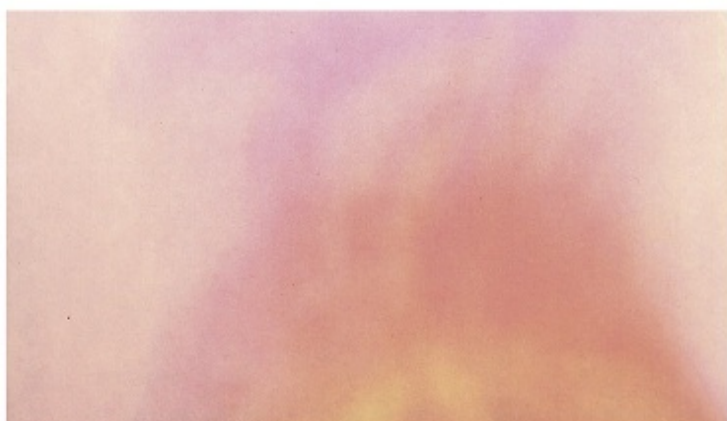
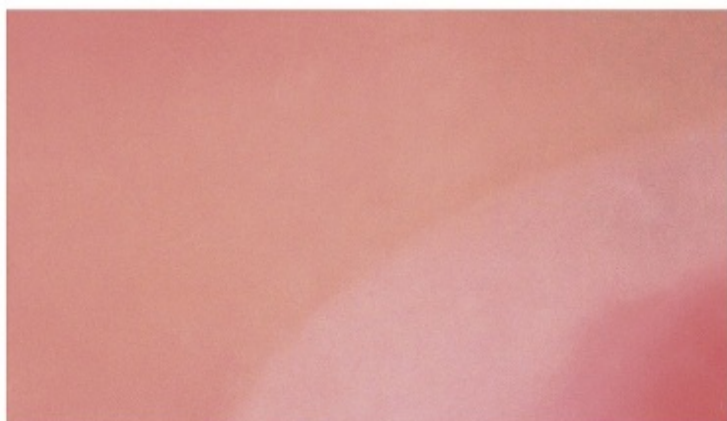
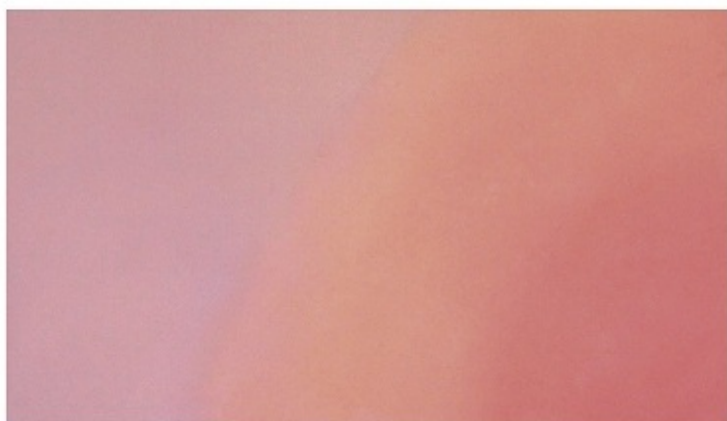
彫刻家。神奈川県出身。幼少より祖父である彫刻家、山崎秀雄氏の影響を受ける。祖父と日本各地の仏像彫刻に触れ、彫刻を学ぶ。東京造形大学彫刻学科中退後、東京芸術大学彫刻科卒業。現在神奈川県秦野市のアトリエにて制作活動を続ける。

<http://www.k5.dion.ne.jp/~koku.ryo/>

高橋輝雄 Takahashi Teruo

「心も記憶も酸化する」をコンセプトに、鉄を雨で錆びさせた立体や平面作品を制作。また、呼吸と酸によるドローイング、白と黒の輪画も手がける。東京、ロンドン、トロントにて展示活動中。

<http://www.teruo-takahashi.jp>



各 16 × 27cm 和紙/パステル

Front Face
Kasahara Mie

笠原美恵

笠原美恵 *Kasahara Mie*

埼玉県出身。多摩美術大学大学院修了。
パステルの粉を丹念に和紙の繊維に刷り
込み、時間をかけて作品を作る。作曲家
や映像作家とのコラボレーションなどで活
動の幅を広げる一方、オーダーメイドの
肖像画なども手がけている。

Information

笠原美恵個展

10/4 [火] → 11/5 [土]

(日・月・祝は定休日)

OPEN 18:00 → 27:00 (火・水・木)
15:00 → 27:00 (金・土)

※曜日により営業時間が異なります。

Gallery ノラヤ

<http://www.noraya.jp/>

巻頭特集◎こころでつながるドローイング

てれねどろ

Telepathy Drawing

ふと、自分以外の人びとは今とここで、何をしているかと考えたことはないだろうか。目の前にいない誰かのことを考えながら過ごす時間は、人とのつながりを感じる瞬間でもあるだろう。もしかしたら、あなたが思い描いた人びとも、その時、あなたのことを思い出しているかもしれない。

誰もが感じるそうした感覚を、作品に取り入れようとしているアーティスト達がいる。今回の特集では、そんなユニークな活動を続けているワークショップ「てれどろ」を紹介する。

◎本文中の人名は敬称略



テレバシー・ドローイング

今から5年前の2006年、彫刻家・山崎ようは、友人達とユニークなワークショップを始めた。「てれどろ」。この不思議な響きのある名前は、「テレバシー・ドローイング」の略称で、「別の場所にいる誰かのテレバシーを受信しながら描くドローイング」を意味する。

「テレバシー」と聞くと、少しいかがわしい印象を受けるかもしれない。広辞苑によると「テレバシー」とは「言語その他の感覚的手段によらずに、ある人の精神から他の人の精神に思考・観念・感覚などの印象が伝達される事」とある。山崎は、同じ時刻に、目の前にいない誰かとのつ

ながりを感じながらドローイングする様子を「テレバシー」に例え、「テレバシー・ドローイング」と名づけた。

「絵を描いていた時にね、絶対おんなじ時間に誰かが描いているだろうなって思ってたんだよ。それは知り合いでも知り合いじゃなくてもね。きつと誰かいるなって」。当時を振り返りながら、山崎は力強く話す。

多くのアーティストは作品をつくる時、目の前のモチーフや作品自体、そして作家自身の内面と「対話」しながら、基本的にひとりてイメージを追求するものだろう。けれども、目の前にはいない誰かがこの瞬間、自分と同じように作品をつくっていたら、そうした人びととお互いをイメージしながら描いてみたらどうなるだろう。何か面白いことが起こるか





絶対おんなじ時間に
誰かが描いてるだろうなって
思ってたんだよ。きっと誰かいるなって。
山崎りょう (彫刻家・てれどろ代表)

2009年「てれどろ特別展」(ギャラリー健)で発表されたドローイングによるインスタレーション。アーティストの他、95歳のお年寄りから1歳のお子さんまで、幅広い年齢層の参加者により別々に描かれたドローイングが、人びとのつながりを表現する作品として生まれ変わった。

もしれない。5年前、そう考えた山崎は、週末に友人を誘い、「それぞれ別の場所にいたまま、同じ時刻にドローイングをする」という遊びを始めた。

始まりは土曜日の夜11時

土曜日の夜11時、「いっせーのせー」でそれぞれ描き始める。完成した作品は、2人が参加していた大手SNSサイトにアップロードして、お互いどんなものを描いていたのが見せあった。

サイト内での2人のやり取りに興味を持った友人達も、次第にこのユニークな遊びに参加するようになる。ある時、「自分も参加したい」と、イギリス在住の友人が加わった。「どこでもできるし、誰でも参加できる」身近な友人との遊びが、遠く離れた人びともつながるきっかけになり始めた。

「これは面白いプロジェクト」山崎は友人の彫刻家・吉武道多とともに、SNSサイト内でコミュニティグループを立ち上げた。2006年、同じ時刻にお互いを感じながら表現する、同刻アート。「てれどろ」がここに誕生した。

右ページの図版右上から
右/てれどろ受信機をかぶりドローイングパフォーマンスを行う山崎りょう
左/2009年汐留アートファクトリーでのワークショップでドローイングを楽しむ参加者。
右下/「てれどろ受信機 3号」高橋輝雄作

2006

ドロ잉を愛する人達が、
共通の志を持って
分かち合う場を作りたかった。

吉武道多（彫刻家・ギャラリー・バックス代表）

見晴らしの良い「てれどろ会議」

画家、彫刻家、デザイナー、イラストレーターその他、興味を持った一般の人びとなど、「てれどろ」コミュニティには幅広いメンバーが集まっていった。活発なやりとりが続くうちに、誰ともなく「実際に展示してみようか」という提案が始める。そんな時、「展示スペースを探していた時に見つけて見学し、とても魅力的な場所だった」と、吉武がメンバーに紹介したのが、東京港区高輪にある洋館・ターミナルラウンジだった。

当時は、SNSサイトで初めて知り合ったメンバーが多く、ほとんどがお互いに面識のない状態だった。しかし、吉武を共通の友人とする者が多かったこともあり、中心となって展示を呼びかけたところ、実際に集まって具体的な打ち合わせをすることになった。

会議の場所は東京都庁の展望室。東京を一望する場所に集まったメンバーのほとんどは初対面だった。「あなたが山崎さんですか？ あなたがめくらさんですか？」という感じでみんな初めてだっ



第1回「てれどろ」展（ターミナルラウンジ：旧木村邸）

高輪ターミナルラウンジは歴史的洋館・旧木村邸を使ったアートスペース（現在は閉鎖）。2007年の第1回展は、メンバーの作品が落ち着いた室内の空気と調和し、和やかな雰囲気での展示となった。会期中にはメンバーによるライブドロ잉などのイベントも随時行われた。

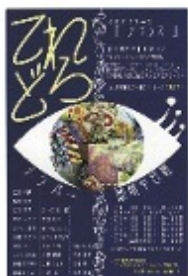
た」と、山崎は振り返る。仕事も年齢も異なり、普段なら到底知り合えない人達と出会えた。「てれどろ」って、やっぱり面白いな」と、山崎は改めて感じたという。想像の中でしか知り得なかった人びとが目の前にいる。会場となった展望室から見える見晴らしの良い景色のように、少しずつ「てれどろ」のつながりも広がり始めていた。

初めての「てれどろ展」

2007年3月、第1回「てれどろ展」が開催された。東京都港区高輪の洋館・ターミナルラウンジに集まった23名のメンバーは、落ち着いた雰囲気のある室内に、各々の個性あふれる作品を発表した。

「てれどろ」と呼ぶようになったのはこの頃からで、これは出品者のひとり、川瀬めぐらの発案によるものだった。この展示以降、どこかつかいのような、不思議な響きのある「てれどろ」という呼び名が、メンバーの間で浸透してゆく。

会期中、メンバーそれぞれが思い思い



第1回展のDM
この頃から「てれどろ」と呼ばれはじめている。

のワークショップやライブドローイングを行った。墨、パステル、クレヨンなど、素材は各人様々で、中には自分で入れたコーヒーを使って描く者もいた。

興味深いのは、当時から「てれどろ」の展示が、単なる「作品発表の場」ではなく、訪れた人びととの「交流の場」となっていたことだろう。

「同じ時間をみんなと一緒に楽しもう」という「てれどろ」の特徴は、インターネット上の「仮想の広場」から離れても失われず、むしろ「展示」という現実の場面で、参加者それぞれの個性や考えをお互いに尊重しながら展開することで、コミュニケーションアートとして、より自由な広がりを持つようになったといえる。

面白いのは、そうした広がりや、特にメンバー同士で示し合わせることもなく、自発的にあらわれたことだった。

「強制するのがきらいなんですよ。とにかく、みんなが楽しめればうれしい」と笑う山崎の人物が、そうした人びとを集めたのだろうか。第1回「てれどろ展」は、出品者はもちろん、来場者にも好評

誰の物でもなく、
みんなが思いついた企画を、
その場その場で進めるのが大前提。

山崎りょう（彫刻家・てれどろ代表）



第2回「てれどろ展」(ギャラリーモント)

2008年に行われた第2回展では、ドローイングの他、受信機をテーマに展示を行った。メンバーそれぞれの解釈によるユニークな受信機がドローイングとともに発表された。



作：高橋輝雄
高橋が会場でパフォーマンスに使用した初号機(上)と2009年展に出品した3号機(左)



作：小泉さよ

◎てれどろ受信機



作：吉武道多

で、ゆるやかな「楽しい」時間を共有する機会となった。

てれどろ受信機と第2回展

「てれどろ」を象徴するイメージのひとつに、「てれどろ受信機」という「コンセプト」なオブジェクトがある。「テレバシー・ドローイング」のため、お互いの「テレバシー」をより多く、明確に受信するための「装置」だ。その解釈については特に決まりはなく、メンバーが自由なイメージで「受信機」を発表している。

美術家・高橋輝雄は、その頃、カナダのトロント在住で、展示にあわせて会場に駆けつけた。当日、高橋は自作の「テレバシー受信機(初号機)」をかぶり、場内でテレバシーを受信するパフォーマンスを行った。「初対面から高橋さんの登場は衝撃的でした」と、出品者のひとり、画家・古内忠輔(ふるうちんすけ)は当時の様子を振り返る。

イラストレーター・小泉さよも、第1回展で手のひらサイズのかわいい「受信機」を発表した。その後も小泉は小さな「受信機」を作り続け、そのひとつが2010年の「ムーンライト展」(主催・月光荘画材店)で「小画箱賞」を受賞した。高橋と小泉の「受信機」がメンバーの関心を集めたこともあり、2007年8月、国立市のギャラリーモントで開催された第2回「てれどろ展」には、「受信機」がモチーフに選ばれた。ユニークな「受信機」が並んだ展示は好評だった。

ゆるい感じでつながりたい。
山崎りょう(彫刻家・てれとろ代表)

新たな展開「みんなでひとつ」

「ゆるい感じでつながりたい」という山崎の考えから、初期の「てれとろ展」は比較的、出品者の自由な表現にまかせていたため、一般的なグループ展に近い発表になっていった。ところが、2009年8月に開催した汐留博覧会「アートファクトリー」から、新たな展開が生まれる。会期中、「てれとろ」は一般来場者と呼ばかれて、自由に絵を描いてもらう参加型のワークショップを行った。95歳のおばあさんから1歳の小さなお子さんまで幅広い来場者が参加したワークショップは好評で、特に子ども達から大変な人気を集める企画となった。

この時のワークショップでは作品サイズを20×20cmに統一し、完成作品をブースの壁に展示していたのだが、このサイズ統一が、後の「てれとろ展」に新たな方向性を与えることになる。

その年の9月、ワークショップで集めた作品と、同じく20×20cmサイズのドローイングをテーマとした「てれとろ特別展」が、ギャラリー健(さいたま市)で行われた。この展示では、集めたドローイングを円形に組み合わせ、ひとつのインスタレーションとして発表した。



汐留アートファクトリー2009「てれとろ」ブース

JR 新橋駅と地下鉄を結ぶ地下通路で行われる「汐留アートファクトリー」は、はじめもなかったブースの壁は、終了時には参加者の描いた作品でいっぱいになった。この年以降毎年出展を果たし、好評を得ている。

てれとろ特別展 2009

全国から募集したドローイングをまとめて、人びとのつながりをイメージしたインスタレーションとして発表。これ以降、会場であるギャラリー健(さいたま市)で毎年企画展を行っている。昨年より産経新聞社の後援を得ている。

みんなのてれとろ

「サイズだけでも決めれば、みんなでひとつの展示が出来るんじゃないか」という山崎の言葉どおり、様々な年齢や職業の人びとが描く個性的なドローイングが、サイズを揃えたことでまとまりを持ち始めていた。さらに、集められた作品が「田」を形つくる様子は、別々に描かれた作品がひとつの表現として成立する瞬間となった。

2つの展示を境に、友人との遊びから始まった「てれとろ」が、見知らぬ人びとの思いをゆるやかにつなげてゆく、新たなアートとして成長し始めた。

「誰の物でもなく、みんなが思いついた企画を、その場その場で進めるのが大前提」という山崎の理想どおり、「てれとろ」は参加メンバーによって、様々な広がりを見せている。

2009年10月、三浦謙樹が主催した「所沢航空公園美術展」では、総勢26名の作家による展示が行われた中、屋外での「野外てれとろ」を企画。同年11月、三浦と高橋が中心となり参加したイベント「野方祭り」に「てれとろ」を出展、どちらも来場者と共にドローイングを行った。



地球とてれとろ展のDM。アースデイをイメージした緑とイラストが素敵なデザイン。

2010年4月には画家・横島藍が世田谷区民ギャラリーを会場に「地球とてれどろ展」を企画。15名の作家から集めた1×1mの作品を組み合わせ、大きなインスタレーションとして発表した。

2011年の「てれどろ」

今年2011年も、「てれどろ」は8月に行われる夏のイベント、汐留博覧会「アートファクトリー」に出展。同じく8月には、恒例の「てれどろ特別展」をギャラリー健で開催する。

今年は「丸」をテーマに、直径20cmの円形に切った紙や布に作品を描く。最終的には集めた作品を会場の壁一面に水玉模様のように並べ、インスタレーションとして発表する予定で、SNSサイトのコミュニティなどを通じて、たくさんの方の参加を呼びかけている。

「アートはみんなで遊べるもの。いつでもどこでも気軽に楽しめるツールとして、どんどん「てれどろ」で遊んでほしい」。山崎は少年のような瞳で情熱的に語りかける。アートでみんなをつなげる「てれどろ」の熱い夏が、今年も始まるようにしている。



山崎りょうと高橋輝雄による受信機と屋外でのライブドローイング。



所沢航空公園美術展「野外てれどろ」

2009年秋、三浦謙樹が企画した「所沢航空公園美術展」において、来場者と一緒に行われたドローイングワークショップが行われた。
※写真は「所沢航空公園展」の様子(参考図版)



地球とてれどろ展

2010年4月、世田谷美術館市民ホールにて、アースデイをテーマに、地球をイメージしたドローイングを展示。1m×1mの作品を組み合わせた、迫力のあるインスタレーションとして発表。

アートはみんなで遊べるもの。
いつでもどこでも、気軽に楽しめるツール。

山崎りょう(彫刻家・てれどろ代表)



汐留アートファクトリー2010「てれどろブース」

2010年8月、参加者とともに描いた作品をボードに入れてつなげてゆくユニークな展示。メンバーによるライブドローイングも行った。



「てれどろ」とその作家達展(横浜・ギャラリー健、後援:産経新聞社)

2010年8月、汐留での参加作品や一般応募作品を集め、ボードに入れた作品を赤い糸でつなげるインスタレーションを発表。メンバー作家の作品展も同時開催した。

◎取材を終えて

「てれどろ」が生まれてから今年で5年。熱い気持ちと共に歩むうち、気が付けば5年が過ぎていたという感じだろう。「いつの間にか」という、そんなゆるさが「てれどろ」の魅力だ。

多くの人は幼い頃、「描く」のが単純に楽しかったのではないだろうか。成長するにつれてそうした機会は少なくなり、気がつくとも「描く楽しみ」を忘れてしまうことが多いのかもしれない。

「てれどろ」の参加者は、大人も子どもも、心からドローイングを楽しんでいるように見える。子どもの頃のように描くのはむずかしいかもしれないが、たまには身近な素材で何気なく、気軽に、自由に描いてみてはいかがだろうか。

もしかしたら、絵を描くのが楽しかった頃のなつかしい「テレバシー」を、再び受信できるかもしれない。

「てれどろ」は、今年も汐留アートファクトリーへの出張、ギャラリー健での展示を予定しています。ご自身の参加・展示作品を募集しています。興味のある方はぜひ遊びに来てください。

◎汐留アートファクトリー「てれどろブース」
会期 8月6日(土)～7日(日)
◎「てれどろ」作家達展
会期 8月23日(土)～28日(日)
会場 キャンプリー健
世田谷区世田谷市役所市民ホール1F
http://galleryken.com/
http://galleryken.com/
協賛/ギャラリー健
後援/産経新聞社
◎てれどろホームページ
http://teledorodrawing.org/

第1話

アートと
ふたりの生活

梅津正史
×
小泉さよ

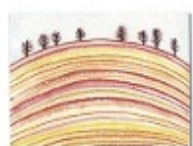
普段は気に留める事もないが、実は私達の暮らしと密接に関わっているアート。その分野は多岐にわたる。このコーナーではアートに携わるカップルの暮らしを紹介してゆく。第1回目は精神医療クリニックに勤め、医療の現場にアートを取り入れる旦那様の梅津正史さんと、奥様でイラストレーターの小泉さよさんご夫妻。



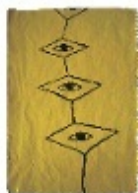
別々の道を選んだからこそ
見えてくる事

「そもそも、造形とか物を作る事自体がどういう事なんだろう、という事に興味があった」と話す梅津正史さんは東京藝術大学で日本画を専攻していた。在学中から「自分で作品を作る」事より「人が物を作る行為」に注目していたという。アウトサイダーアート^①や自閉症を研究し、ゼミのプロジェクトから発足した地域精神医療と芸術表現「D.O.C.E.（エボック）」^②に参加。そして今年4月から開設した西條クリニック^③（東京都新宿区）に勤務している。アートセラピーや芸術療法などの言葉の枠の中だけにとらわれない精神医療を目指し日々患者さんと向き合っている。

「アートを目的化しないでやれるといいなと思うんです。アートを癒しや治療の目的として使いたくはない。結果を出す為の手段としてしか用いられないのなら、ドローイングやアート表現が可哀想です」と正史さんは語る。これは様々な形のアートを見て来た人だからと語れる言葉だろうか。



一緒に暮らす2匹の猫との日々を描いたイラストエッセイより、まったり、ほのぼのとしたタッチが心地よい。右は本文中にも触れた色鉛筆の描き方を紹介する絵本より。ブログ「ちよらくノート」では「ちようじろう」さんと「らく」ちゃんのかわいらしいネコとの日常の出来事が繋がる。http://chorakunote.cooolog-nifty.com/blog/



梅津正史展「不思議なことば」
平成15年度学位審査（課程博士）のための作品公開より。
この展示に向けて300枚近くドローイングを描いた。無意識で描いた時の作品の方が、より自分の心に響く絵になる。（梅津正史）

梅津正史 Umetsu Masafumi

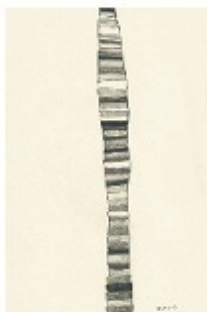
1975年北海道生まれ。99年東京藝術大学美術学部日本画専攻卒業。2004年東京藝術大学大学院美術研究科博士課程修了、東京藝術大学先端芸術表現科非常勤講師。06年川口市メディアセブン勤務。08年医療法人讀友会あべクリニック勤務。11年西條クリニック勤務。美術と精神医療の境界領域でできることを模索・実践している。西條クリニック http://saijo.net/



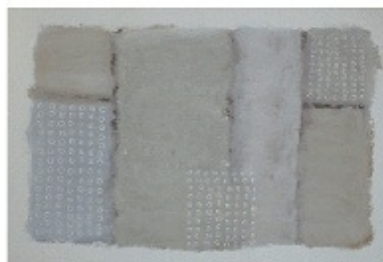
展示の様子（2004年・東京藝術大学取手校地メディア教育棟 1F ギャラリーおよびピロティにて）



ドローイング(鉛筆・文庫本ノート)



ドローイング(オイルパステル・画用紙)
日々の暮らしのなかで、無意識に出てくるかたちを大切にしている。(小泉さよ)



小泉 さよ Koizumi Sayo

1976年東京都生まれ。94年東京都立芸術高校美術科卒業。99年東京藝術大学日本画専攻卒業。01年東京藝術大学大学院修士課程修了。主に鉛筆や色鉛筆を使い、主に猫を描くフリーイラストレーター。ドローイング作品や、小立体の作品なども制作中。「うちの猫のキモチがわかる本」(Gakken)にて「まったくゆるゆる猫日記」を連載中。主な著作に「まったくゆるゆる猫日記」(Gakken)、「猫とあわせふたり暮らし」(池田書店)、「猫ばんちー二匹の猫との暮らし」(KKベストセラーズ)ほか多数。

小泉さよ ホームページ
<http://www.sayokoizumi.com/>



「てれどろ受信機」

世の中には、人と繋がるためのツールやシステムは山のようにあるけれど、最も原始的である「想念」や「虫の知らせ」「テレパシー」など、人間が本来持つ力で繋がるためのツールのひとつとして作っています。日々誰かから発信される、どこからか不意にやってくる、とりどめのない些細な思いを受信して知らせてくれる装置。(小泉さよ)

結婚9年目の2人は今、3歳の息子さんと「ちようじろうくん」「らく」ちゃんとの2匹のネコと一緒に暮らし、「制作に費やせる時間は少ないですね。1日にちよつとずつとかになっちゃいます」そう語るさよさんは、午前中、子供を保育園に預けて家事をすませ、午後の時間を制作と仕事に当てている。正史さんは

「てれどろ受信機」の特集でも紹介している「てれどろ受信機」(7頁参照)などを数多く作ってきた。そしてその受信機が昨年、月光荘画材店の公募展にて120人を超える応募者の中から見事「月光荘賞(小画箱賞)」を受賞、その受賞者展が今年11月下旬に開催される。「今後もイラストのお仕事と並行して自分自身の作品制作を続けていきたい」と控えめな口調ながらも力強い眼差しで話してくれた。

小泉さよさんは数多くの書籍にイラストを提供し、自らも本を執筆している人気のイラストレーター。そのきっかけは「高校のときの同級生が色鉛筆の描き方の絵本を作っていて、それをお手伝いしたんです」とのこと。その後作品を見た出版社から仕事の話を買っようになり現在の仕事に就いた。ネコと暮らしのほのぼのとした日常の出来事を、色鉛筆や鉛筆で生き生きと描く。ネコの視線からの言葉やユニークで可愛いイラストを見ていると、思わず口元が緩んでしまう。

- ① アウトサイダーアート 芸術の教育や訓練を受けておらず、名声や流行にとらわれないことなく、自然に表現した作品のこと。
- ② DPOC 2002年東京藝術大学先端芸術表現科のゼミから始まった「DPOC」のゼミメンバーの領域横断プロジェクト。 <http://www.dpoconet.net/> erika@erika.dpoconet.net
- ③ 西條クリニック 医療治療の支援(アート)を追求することにより、精神疾患に悩む患者さんに少しでも良質なサポートをめざす精神医療クリニック(東京都新宿区) <http://seio-clinic.com/>
- ④ 銀座月光荘画材店 大正6年(1917)創業。黄函庫も営む老舗画材店。 <http://www.vesta.dti.ne.jp/~gekkoso/>

2人は大学の同級生で、その後同じ研究室に在籍。「最初から彼女の絵が好きだった」と正史さん。展覧会に行っても好きな絵が一致する事や、好みの映画が同じなど、作品に対しての価値観や美意識は、学生時代の頃から似ている事が多かった。互いの作風が似ている事を意識する頃もあったが、今は医療スタッフとイラストレーターという違う視点から意見をかわし、それが新たな発見や自信に繋がっている。正史さんが「これで今、2人で制作活動していたらかなり喧嘩になるかも」と言うのと「どっちが先に描いたとか真似しているんじゃないかとかね」とさよさんも笑顔で答える。そんな2人からは、価値観が似ている者同士だからこそ得られる、理解や信頼の深さを感じた。

(編集部)

Information

昨年、「月光荘賞(小画箱賞)」を受賞した小泉さよさん。この秋、月光荘画材店の「小画箱」で受賞者展が行われます。会期:2011年11月28日(月)~12月4日(日)。ぜひお立ち寄りください。くわしくは下記まで。
©銀座月光荘画材店 <http://www.vesta.dti.ne.jp/~gekkoso/>

エリトアのホームページでインタビューの様子を紹介しています。くわしくは <http://www.eritoo.com> まで。



香港徒然日記

第二話 香港カフェ事情

香港はイギリスの影響を多分に受けている香港島と、中国っぽいごちゃごちゃ感がたっぷり残る九龍半島から成っている。

香港島にはひとときわ高い山



ビクトリア・ピークがあり、みんなが一度は目にしたことがあるであろう、香港の美しい夜景の写真のほとんどはここから撮影されたものだ。
香港に行った際には必ず行く



もりあきこ

「さそり織り」という現代手織りで自己表現、ものづくりをする。2008年から日常の気づきを織る「日記織り」に取り組み、2009年、夫の香港勤務を機に日本と香港を行き来する生活がはじまる。
<http://aiko-mori-top.blogspot.com/>

きたい場所や店があるが、ここビクトリア・ピークもそんな場所のひとつだ。

ピークへは信じられない程急な坂をガタガタと上がる ترام。か、スリリングにとばす2階建てバスのどちらでも行くことができる。どちらもお薦めだ。

今では新しい展望台もでき、お土産物屋やレストラン、バーがたくさんあるが、そこには目もくれず、120年の歴史ある建物が魅力的なカフェ「ザ・ピーク・ルックアウト」へ行き、遅めの朝食かスイーツを食べたい。せっかくの眺望はないが木々に囲まれたテラス席、イギリスと中国が融合した趣ある屋内席、どちらも心落ち着く空間だ。
おいしい朝食なら、本当は町中のお粥や麺類を食べさせるお店の方がコストパフォーマンス

梅酒

酔生

二杯目

自家製梅酒



連日の真夏日。暑い日の酒もまたうまい！梅酒作りに挑戦してみた。梅酒が好きで好きで好きだから独自の味を生み出したくなったというわけではなく、梅酒好きな女性が多いのでモデルのために作った。ということは内容に……。

レシピを見ると至極単純。

【用意するもの】
4ℓビン、青梅(1kg)、氷砂糖(50g)、
ホワイトリカー(1.8ℓ)

- 一、青梅を水に3時間程度さらしてアクを取る。
- 二、青梅のヘタを取り、汚れを落として水をふき取る。
- 三、殺菌したビンに青梅と氷砂糖を交互に入れ、ホワイトリカーを注ぐ。
- 四、3ヶ月以上寝かせる。

ホワイトリカーをブランデーに変えて作った。さらに、4ℓビンで作るところも2ℓビン2本に分けた。



上：押 (The Pawn) という名のカフェバー。壁にはさまざまな「押」のネオンの写真が飾られている。
右：茶餐廳の美都餐室 (Mido Cafe) 2階の風景。ミニトグリーンの店内とアーチ型の窓がノスタルジック。



ンスも含めお薦めだが、こんな優雅な時間にも時には必要だ。

さて香港の喫茶店といえは茶餐廳(チャーチャンテン)。カフェではなくあくまで喫茶店ということばがピッタリだ。街の至る所にあり、どこも香港ノスタルジーを感じさせる。お食事は画期的に美味しい訳ではなく、香港のB級グルメと呼ぶにふさわしい内容だ。そして美味しくないミルクティーを飲

みながら、昼下がりを読んだら過ごすおじさんを観察するのにもなかなか楽しい。

そんな茶餐廳の中の一つ「美都餐室 Mido Cafe」は海外のファッション誌のロケなどにも使われたという超有名店。美しいタイトル使いの店内と、2階のアーチ型の窓から入るやわらかい日差しには格別のリラクゼーション効果があるような気がする。

街を歩いていると「押」というネオンがたくさんある。シンブルに漢字一文字、赤と緑、ちよつと気になって写真に収めた。

そうこうしていたら「押」というカフェバーを発見。細くカーブした階段を上がると、想像を遙かに超えた広い空間が目飛び込んできた。高い天井、古く不揃いな家具はゆったりと配置され、ここも長居したくなる場所に違いない。香港の人たちは食事をしながらお酒を飲む習慣がない。サツとごはんを食べて、こんな空間でゆるーくお酒を飲むのがお洒落な香港スタイルなのかな。モロ片手に独りビールを飲む若者やグループでおしゃべりを楽しむ人たち、デザートでの甘いカクテル。それぞれの時間が心地よい距離感で流れていた。

ちなみに「押」は日本では「質」といわれる場所だった。

*トラム
香港島内を走る路面電車。現在ではめずらしい2階建車両を使用していることから、現地の人びとだけでなく、香港を訪れる観光客にも親しまれている。

片方にはレモンを入れてみた。これは凄いやメキ!!と思ったが、「レモン梅酒」なる商品がすでに市販されていることを後ほど知った。梅以外にもカリンやグレープフルーツなど様々なものを酒類に漬けて楽しむ家庭が多い。しかし、一般家庭で作る場合、酒税法による制限がいくつかある。

◎漬けるための酒類はアルコール度数20%以上のもの。

20%未満の酒類では新たに発酵する可能性がある。発酵は醸造につながる。醸造をしないといけない。

◎酒類に漬ける物は定められたものに限る。

糖類・梅・一部を除く果物など。ぶどうや多くの穀類はNG。

◎他人(友人など)に飲ませてはいけない。

販売はもちろん駄目。飲んで良いのは自分や家族まで。

つまり、好きなものを作って誰にでも飲ませたい(売りたい)なら「大量に作って利益をあげて税金を払いなさい」ということ。

違反すると罰金や懲役の可能性があるので、法律を守りながら楽しく美味しい酒を作ろう!



酔生 Sui Sei

酒飲んだり・料理したり・印鑑彫ったり・酒飲んだり・イラスト描いたり・映画見たり・仕事したり・酒に飲まれたり・本を読んだり・モンスターをハントしたり・酒飲んだりしながら日々過ごしております。

僕と鉄

第貳編 流れにまかせる



上:「After 7 days of fasting」
2002年 アクリル、カンバス
7日間の断食を行った時に見えた、キッチン
の光景。陰と陽を表す黒と白のマスの中には、反時
計回りと時計回りの渦巻きのテクスチャが描かれ
ている。黒と白のテクスチャは、3回以上重ね
塗りされている。黒と白で渦巻状に筆を動かして
塗るという行為が瞑想に近いものとなっている。

右:「Jazz man」
2005年 スカルピー、アクリル絵具
制作途中に、なんとなく、粘土がその形に見え、
それを盗い付けてできたもの。

僕

は鉄と向き合っ
て、ほぼ毎日
を過ごして
いる。鉄を切
ったり、溶
接したり、雨
に打たせたり
、工場の仕事
の時もあるし
、自分の作品
の制作の時も
ある。



創作出来るものを探してき
た。エレクトーン、書道、写真
小説書き、絵画、ジュエリー制
作、粘土等々。全てのこと
が感覚的にも、技術的にも、鉄
アートに深く関係している。
どんな素材を使い、何を創
作するかは、人生の中で
の事象や人との出会いに影
響される。そして、僕の周
りに起こる偶然の一致、も
しくは、リンクロニシテイ
というものの、後押しされ
ることが多い。

鉄との出会いの時もそう
だった。妻が住んでいる大
田区に引越すことが決まり
、そこで生活しながら制作
が出来る環境を探していた。
金属系の工場が多い大田区
。その中で、北嶋製作所
に見学に行き、ヘラ絞り体
験をした。その夜、何気な
くテレビを付けたときに、
丁度、北嶋製作所がその
チャンネルで紹介されて
いた。そんな偶然もあっ
た。そんな偶然もあつた。そ



高橋輝雄
Takahashi Teruo

「心も記憶も酸化す
る」をコンセプトに、
鉄を雨で錆びさせた
立体や平面作品を制作。
また、呼吸と咳による
ドローイング、白と黒
の絵画も手がける。東
京、ロンドン、トロ
ントにて展示活動中。

<http://www.teruo-takahashi.jp>

エリトアWEB版で「僕と鉄」の全文を紹介して
います。ぜひご覧ください。<http://www.eritoo.com>

「Ages of Zen」2006年
銅塗料、錆剤、石膏、合
板
ギリシャ神話で女神ア
テナの持つ盾 Ages に
禅のコンセプトを融合
させたもの。盾には、
メトウサの顔の代わり
に自分の瞑想中の顔、
蛇の代わりに煩惱を
意味するベニス配置
してある。盾に影ら
れている文字、Ages
of Zen の、of Zen は
発音をなまらせると
イヴゼンと読み、
well being という意
味のギリシャ語に
近い発音になる。
well being は禅の
コンセプトの一つ
でもある。

Voyage with the Iron



ちょっぴり見方を変えて
身近なものから形にしたら、
それが素敵なアート作品に！！
ほんの少しのひらめきで
生活を楽しくしてくれる
アートの世界がまたひとつ
広がります。

ちょい悪バイカー&真面目レーサー
2010年 ネジ、ボルト、
エポキシ樹脂系化学反応形接着剤

想像通りに出来たお気に入りの作
品。タバコをくわえたひげのライ
ダーのイメージはすぐに浮かんだ。
対になるように同時期に制作した
車も部品からインスピレーションを
受けて完成。



ネジ立体製作所

古田紀彦

第1回 ネジに命を吹き込む

「ネジでなにか作りたいって
いうのは、どこかでずっと思っ
ていた」と話す古田紀彦さんは
普段、地元の自動車整備工場に
勤める整備士さん。この数年、
もの作りに関わる友人に囲まれ
る機会が増えた古田さんは、仲
間たちから刺激や影響を受ける
うちに、自分も何か作りたいと
考えるようになった。

2009年、友人に誘われて
参加したイベント会場で、古田
さんはネジを使って創作するワ
ークショップを開いた。子ども
たちにも好評で、とても楽しい
時間となった。子どもたちと一
緒に遊びながら自由に作った経
験が、ネジの作品を始めるきっ
かけになったそうだ。

使う材料は職場で使えなくな
った廃材部品。その廃材同士を
エポキシ樹脂系の接着剤で接着
してゆく。「毎日職場で身近に
触って慣れ親しんでいるネジや
ボルトに命を吹き込みたい」と、
楽しそうに笑う古田さん。

昨年には、自ら「ネジ立体
製作所」を開設。仕事の傍ら、コ
ツコツと作品制作を続けている。
これから作品を増やして、た
くさんの人に見てもらいたいと、
今後の創作に意欲を見せる。



古田紀彦
Furuta Norihiko
1973年埼玉県
川口市出身。堀
口自動車整備工
場勤務。高校卒

業後自動車整備士になりネジと共に
20年。2009年3月ワークショップ
にて初制作。2010年9月ネジ
立体製作所開設、所長となる。これ
からも身近にあるネジたちに愛情
をこめ命を吹き込みつづける。

「ネジ立体製作所」ロゴデザイン：奥谷美砂子、文責：編集部

編集後記

着地点や目的はなくとも、ものを見て単純に感動
し、絵を描く。一本の線を引く。そういう行為は
お金にならなくとも、ただそれだけでも尊い。
その尊さこそ、アートの根拠にあるものなのかな
と思う。だからこそそういう部分にもっと、光を
当てて行きたい。今回様々な切り口からアートの
関わる方々のお話を伺っていて、改めてそう思っ
た。

2011年7月 笠原美恵

◎主な配布先(地域別50音順)

- 【埼玉県】 ギャラリー健
- 【さいたま市】 ギャラリーモント
- 【国分寺市】 cafe slow
- 【渋谷区】 Onlyフリーペーパー 渋谷
- 手織道整さをり(代々木)
- 【杉並区】 GALLERYノラヤ(高円寺)
- ギャラリー遊(高円寺)
- 【中央区】 Oギャラリー(銀座)
- ギャラリーなつか(銀座)
- ギャラリーユニグラス(銀座)
- 【千代田区】 アーツ千代田3331(外神田)
- 馬喰町ART+EAT(東神田)

※配布先の詳細はホームページをご覧ください。

エリトアホームページ <http://www.eritoo.com/>

◎エリトアでは宣伝・広告を募集しています。

◎設置をご希望の方は別途ご案内をいたします。

◎お問合せは編集部までお気軽にご相談ください。

エリトア編集部 eritoo@mail.goo.ne.jp

発行人／三浦謙樹 編集人／木村和弘 編集／笠原美恵
ロゴデザイン／高瀬さほりお 本文レイアウト／吉野章

エリトア

第2号 2011夏

2011年7月15日発行

エリトア編集部 〒339-0012 埼玉県所沢市並木8-7-1-1009 <http://www.eritoo.com/> E-mail eritoo@mail.goo.ne.jp
発行人/三浦謙治 編集人/木村和弘 ©本誌掲載の文章、写真、イラストなどの無断転載・複製(コピー)は禁じられています。



造って 食す。

自分で作った器で食す喜び。
浦和造形陶芸教室



すごくおいしい

【おしながき】

- ・子ども造形教室
- ・陶芸教室
- ・絵画教室
- ・彫刻教室
- ・イラストマンガクラブもある(部誌↓)



Arts Labo. Urawa

浦和造形研究所

<http://artslabo.com/>「浦和造形」でご検索を